2023年11月25日発行
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター　55号
http://www.jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075-366-2223
Email:
jsics@world.ryukoku.ac.jp

日本国際文化学会第22回全国大会開催報告

第22回全国大会　実行委員長　鈴村裕輔（名城大学）

日本国際文化学会第22回全国大会は、2023年7月8日（土）、9日（日）の2日間にわたり、名城大学ナゴヤドーム前キャンパスにおいて開催されました。
「世界の中の日本と日本の中の世界」という総合テーマの下で行われた全国大会では、共通論題が5件及び自由論題が6部門で15件、フォーラム「コロナ禍における国際文化学教育」並びにシンポジウムが行われました。

共通論題では、例えば実務家を交えた報告（共通論題5「マンガはコミュニケーション・ツールになり得るか―マンガによる自己表現ワークショップの課題と展望―」、代表者：堤ひろゆき会員）、学会の創立20周年記念事業の内容を踏まえた企画（共通論題3「『国民国家以後の時代』の国際文化交流再考―主体、理念、媒体を中心に」、代表者：齋川貴嗣会員）、前回大会の大学院生交流会の成果を受けた発展的な試み（共通論題1「近代における西洋文明の受容と選択―周縁からのアプローチ―、代表者：田中佑実）など、例年の全国大会以上に魅力的な内容が揃いました。

自由論題では、期せずして類似する主題が複数集まり、6つの部門にそれぞれ「甲と乙」という形で名前を与えることを可能にしました。

いずれの発表においても魅力あふれる報告と活発な質疑応答や意見交換が行われたことは、全国大会の基層ともいうべき共通論題及び自由論題の充実ぶりを示していたと言えるでしょう。

また、フォーラムでは、新型コロナウイルスの感染拡大という状況の下で、各大学がどのようにして異文化理解や多文化共生などに関する国際文化学教育を維持したかについて、実例に即した報告がなされました。

今回のフォーラムを通して各校が様々な制約を乗り越えつつ不断の努力によって国際文化学教育を継続したことが改めて示されました。これに加えて、第20回全国大会におけるバーチャルエクスカーションが実現するまでの取り組みや、2022年度ICCO短期集中セミナーの参加者で現在は大学院生として学会に所属している会員の報告など、「コロナ下」から「コロナ後」に至る学会の活動の連続性が明瞭に描き出されたことは、今回のフォーラムの大きな成果の一つでした。

シンポジウムでのスクリーチ氏、田中氏

さらに、シンポジウムでは田中優子氏（法政大学名誉教授）とタイモン・スクリーチ氏（国際日本文化研究センター教授）が基調報告者として登壇し、江戸時代の日本が諸外国とどのように交流し、国際社会に対してどのような影響を与えていたかが布や日光東照宮の灯籠などを手掛かりに検討され、参加者との間で熱心な対話がなされました。

以上のように、中部地方で初めて行われた全国大会が、会の内外から多くの方の参加を得てつつがなく終えることができたことはひとえに皆様のお力添えのたまものであり、実行委員一同の深く感謝するところです。

次回の全国大会は東洋大学白山キャンパスにおいて第23回全国大会が開催されます。また皆様とお会いできることを楽しみにしております。

会場では活発な議論が繰り広げられていました

第22回全国大会　発表要旨

【共通論題1】「近代における西洋文明の受容と選択―周縁からのアプローチ」

田中佑実（代表）、王佳超、閻秋君、阿部純、葉柳和則（討論者）

共通論題１「近代における西洋文明の受容と選択―周縁からのアプローチ」は2022年神戸大学での院生交流会をもとにした若手研究者主体の共通論題であった。発表者4名の研究は、一見全く異なる方向を向いているようでいて、国際文化学の重要なトピックの1つである文化触変を扱っているという点で共通している。文化触変は近代国民国家成立において避けては通れない不可欠なものであり、他者・他国との接触のもとで生じる反応は、異なる地域、異なる立場の個人や集団によって多様であった。文化触変の過程では、呈示された文化要素に対して選択と受容を行なう受け手側の動きが色濃く現れるが、そのプロセスは決して一様ではなく、葛藤や違和感、そして工夫を伴っている。

本共通論題は思想、産業、芸術、メディアの側面から文化触変における具体的な接触状況を眺め、受け手側の地域と立場をもとに文化触変の多様性を描き出すことを目的とした。また、本共通論題で示した「周縁」は「西洋」を中心として定めたときのものである。四名が扱った個人や集団は地理的、社会的地位という観点からバックグラウンドとしての周縁的要素を抱えていたため、文化触変の過程で起こる受け手側の選択と受容の多様性を示す本共通論題において「周縁」というキーワードは欠かせないものであった。

第一発表者の王佳超会員は中国から日本へ亡命した思想家、梁啓超による西洋の「国家思想」ないし政治思想の受容とそこから読み解く「国家」の理論的な思考の展開を検討した。梁啓超の「憲法」概念の受容は主にラートゲンの講義記録の影響を受けており、政治制度についても東京大学法学部出身の学者たちからの影響を受けていたことを確認できた。

第二発表者の閻秋君会員は、幕末維新期に西洋文明としての鉄道と向き合った日本の漢学者たちを取り上げ、明治政府が中央集権を目的として鉄道建設を推進していくなかで、在野の漢学者が鉄道という外来文化要素をどのように受容したかを検討した。在野の漢学者という斬新な切り口から鉄道による空間と時間の変化に対する彼らの理解を分析することで、西洋文明と向き合っていった漢学者の様子を明らかにした。

本共通論題代表であり第三発表者の田中佑実会員は、ナショナル・ロマン主義が台頭したフィンランド芸術の黄金期において、芸術家アクセリ・ガッレン＝カッレラが「文明」としてのフィンランドを意識しながらも「野生」をフィンランドらしさとして求めたことを指摘した。しかし実際のフィンランドの森は「文明」を受容していく過程で、理想とはかけ離れたものになっており、理想と現実の乖離を経験していたガッレン＝カッレラを浮き彫りにした。

第四発表者である阿部純会員は第二次大戦期の日系人強制収容政策に対し、日系人が行なった「リドレス(過ちを正す)」運動（日系人強制収容への補償運動）を解釈する日本のメディアを取り上げ、アメリカの例外主義や民主主義が日本で受容される過程を検討した。新聞メディアの報道を分析対象として、当時の冷戦・教科書問題・日米関係などと絡まりながら「リドレス」概念が変容していく諸相を明らかにした。

コメンテーターの葉柳和則会員からは、「他者」としての西洋文明を、度量衡を異にする周縁が選択、受容、葛藤していく文化触変の内情を描き出すという4つの発表の共通点が明確且つ理解を促す形で示された。また、文化触変の現れ方の多様性だけでなく、実体的同一性に留まらない、関係的な同一性がそれぞれの発表を繋ぐものとして指摘された。さらにそれぞれの発表に対して、周縁という立場の重複性やその限界、国民国家を形成していく上での「らしさ」の創出について質疑が行われ、時間不足の中ではあったが、高橋梓会員及び目黒志帆美会員から個別の内容に関する質問も受けることができた。それぞれの研究において課題は残るが、文化触変という大きな概念を下支えするものとしての多様な事例を、本共通論題によって示すことができたのではないだろうか。

今回の共通論題は、研究者としてスタートを切り始めた4名にとって共同研究という側面からも大変実りのあるものであった。院生交流会を始め、研究会に関わる費用など、多大な援助をしてくださった日本国際文化学会には感謝を申し上げたい。この学会を通して、このような若手研究者による創発的な交流が続いていくことを期待している。

【共通論題2】「国際文化学における国際交流基金研究の意義と課題――特殊法人時代を中心に（1970年代～2000年代）」

岡眞理子（代表）、川村陶子、坂戸勝（報告）、牧田東一、小川忠、嶋根智章（討論者）

2022 年に国際交流基金が創立50周年を迎えるのを前に、基金の新旧職員有志と国際文化交流に関心を寄せる研究者が集まって、2019年12月に特殊法人国際交流基金研究会を立ち上げた。同研究会は、特殊法人時代の国際交流基金が日本を取り巻く世界情勢の変化を背景に発展してきた過程を検証し、その成果と課題を総括することをめざして、2023 年１月までほぼ月一回のペースで、交流基金に直接かかわった講師の報告・証言とそれに基づく討議からなる会合を開催し、その記録を配付資料とともに議事録集上下2巻にまとめた。

研究会会員で構成する本パネルは、同研究会の３年間の研究活動をふまえ、国際文化学研究における特殊法人国際交流基金を研究することの重要性、必要性を明らかにするとともに、今後の研究テーマ、課題、方法論、方向性等について幅広い視点から議論することで、戦後日本の国際文化関係/国際文化交流研究の地平を広げることを試みた。

導入として、岡が研究会の概要（趣旨、方法、テーマなど）、研究会が遺した今後の課題、および共通論題の趣旨について説明したのち、2名が報告し、それについて3名が討論を行った。

第一報告では、国際文化関係研究者の立場から、川村が「国際文化関係史のなかの国際交流基金」と題して、日本の〈くに〉としての国際文化関係運営の中心的機関としての特殊法人国際交流基金が、冷戦の時代からグローバル化の時代への移行期に、多様な文化背景を持つ〈ひと〉を巻き込んでよりよき国際関係を築こうとした現場での創造的活動を評価しつつ、〈文化外交〉運営がはらむ内在的矛盾について指摘し、かかる歴史的分析が国際文化学の一領域として重要であると論じた。

第二報告「特殊法人国際交流基金の軌跡―『相対的独立』を巡って」では、特殊法人国際交流基金の誕生から独立行政法人への移行後までを見届けた立場から、坂戸が設立当初から内包されていた二つの機能―外務省の「わが国に対する諸外国の理解」(日本文化の発信、自国理解)と交流基金の「国際文化交流」（国際相互理解）―の関係の変遷について特殊法人時代をたどって考察し、近年の「日本文化の発信」偏重から本格的に脱却するためには強い政治的意思が必要であると述べ、日本の国力の地盤沈下のさなかで、「文化が築く国際関係」の価値がどれだけ維持できるかを問うた。

これに対して牧田は、国家や政府に関係のない民間交流の視点から、財団を資金規模の大きい戦略的な助成財団と、特定の事業に特化した事業財団に分けた場合、国際交流基金は両方の側面があるとした上で、成功したのは例えば日本語教育分野の民間の育成など助成財団的な事業で、事業財団としては事業終了後にどのような民間活動が継続したのかが評価の基準となるとコメントした。

小川は国際交流基金元職員の立場から、研究会が当初から意図していた特殊法人時代の国際交流基金に関わる資料の保存・蓄積・公開の促進に関し、国際交流基金自体のライブラリー機能が衰えていることに懸念を示すとともに、研究会が果たせなかったこととして、海外の日本研究の振興、80年代後半の日本語国際センターの設立などのテーマが残されていると指摘した。

最後に基金現職員の立場から、嶋根が国際交流基金による異文化交流/接触の類型チャートを提示し、「片方向型」、「双方向型」、「協働創造型」に分類して、特殊法人時代から独立行政法人時代への変化の分析を行い、70年代の時代を背景として、設立当初から双方向性が意識されていたことを強調した。

その後の登壇者間の議論では、川村から今後の論点として、研究するためのモデル、資料の保存・公開、諸外国との比較研究の必要性が指摘され、坂戸より牧田のコメントに対し、基金は7～8割事業財団であるが、成果を問われれば日本語と日本研究を挙げると答えた。会場からは、ユネスコ憲章への意識、国際機関との連携、知識人の定義、事業評価、協働創造型などについての質問が寄せられ、活発な質疑が行われたことに、代表者として感謝の意を表したい。

【共通論題3】「『国民国家以後の時代』の国際文化交流再考―理念、主体、媒体を中心に」
齋川貴嗣（代表）、高光佳絵、湯浅拓也、大山貴稔、張雪斌、都丸潤子（討論者）、芝崎厚士（討論者）

本共通論題では、日本国際文化学会20周年記念事業「国家と国際文化交流」分科会メンバーが、近代から現代に至る国際文化交流の諸相を主体、理念、媒体に焦点を当てつつ、目下執筆中の事典項目の報告を行った。

まず齋川貴嗣会員（高崎経済大学）が「国際文化交流の諸相―個人、国家、国際組織」と題して、特に国際関係論の領域で積み重ねられてきた国際文化交流研究を概観し、その特徴と今後の展望を試論的に整理した。第2報告では、高光佳絵会員（千葉大学）が「国民国家にとっての『国際文化』とは―国際規範形成をめぐる国家、国際組織とINGOの相互作用」と題する報告を行い、国家が「国際文化」に関心を持つ背景を国際規範形成の観点から分析を行った。第3報告は湯浅拓也会員（大阪産業大学）による「国際文化交流における宗教―近代日本のキリスト者とミッショナリーの関係性から」であり、新渡戸稲造と河井道を中心に国際文化交流の宗教的側面とその意義を検討した。第4報告は大山貴稔会員（九州工業大学）が「『日本の開発学』という憧憬―開発援助の検証から近代化経験の伝承へ」と題し、北岡伸一理事長期の国際協力機構（JICA）を対象に現代日本の国際文化交流政策を形づくる力学を考察した。そして第5報告の張雪斌会員（大阪経済法科大学）による「広報文化外交のデジタル化―世論の誘導と大衆との対話」では、中国の事例を中心に情報通信技術の進歩が国家の広報文化外交に与える影響を分析した。

以上5つの報告に対して、コメンテーターの都丸潤子会員（早稲田大学）と芝崎厚士会員（駒澤大学）が、全報告に共通する「国家と国際文化交流」を現代的視点で問題化する際の論点を補足するとともに各報告内容への指摘を行った。その後、最終時間帯のセッションにもかかわらず多くの参加者を得たフロアを交えて、活発な意見交換が予定時間を大幅に超過して行われた。報告者や討論者がフロアに質問を投げかけ、フロアの参加者がそれに応じつつさらなる問題を提議するなど、一体感に満ちた知的協働の営みが繰り広げられた。本共通論題そのものが、まさに所属や専門分野、世代を超えた「文化交流」の場になったと言えよう。

【共通論題4】「鶴見和子の生涯と内発的発展論」
松居竜五（代表）、馬場孝、平島（奥村）みさ、田村義也

鶴見和子（1918-2006）は、戦前の米ヴァッサー大学への留学を皮切りに、社会学を中心とした幅広い分野で活躍した学者である。戦後は『思想の科学』誌での言論活動や、ライフヒストリーの発掘、プリンストン大学での日本人BC級戦犯に関する博士論文、水俣病をめぐる環境問題への関心、地球志向の比較学としての南方熊楠の再評価など、さまざまな先駆的な仕事を展開した。また、日英両語での研究と並行して、短歌や日本舞踊などの芸術文化にも親しんでいる。1995年に脳梗塞で倒れてからも、多様な分野の知識人との対話を通じて、自由闊達な学問的発信を続けた。

本共通論題では、こうした鶴見和子の多面的な学問活動を、国際文化学と関連付けることを目的としたものである。発表としては、馬場孝が「 内発的発展論と文化触変論――鶴見和子の学問と国際文化学への示唆」、平島みさが「社会変動と個人――鶴見和子の「内発的発展論」形成過程を辿る」、田村義也が「地球志向の思想史：鶴見和子の南方熊楠論」、松居竜五が「鶴見和子の生涯と歌作」と題しておこなった。結果として、鶴見の学問的志向が、本学会の目指す国際文化学と多くの意味で重なる問題意識に支えられていたことが明らかになったと考えている。

【共通論題5】「マンガはコミュニケーション・ツールになり得るか ―マンガによる自己表現ワークショップの課題と展望―」 堤ひろゆき（代表）、伊藤理絵、倉田よしみ、白石さや（討論者）

本企画は、視覚情報を用いたコミュニケーションにより、音声言語および文字言語に限定されずに子どもたちが自己を表現できる可能性の模索を目的とする。これまで、子どもたちの教育は言語によるコミュニケーションへの習熟が暗黙の目標とされてきたが、幼少期の言語が未熟であること、非日本語話者の生育環境、聴覚障害等、言語コミュニケーション習得の前提が多様な子どもの存在は無視できない。彼ら／彼女らが自己を表現し、他者とコミュニケートできる方法と可能性は広がる必要がある。

上記の目的および問題意識にもとづき、日本において洗練されてきた視覚情報による物語技術としてマンガを用いて、視覚情報による自己表現・コミュニケーションの方法をワークショップにより開発することを目標とした。マンガは、「マンガ文法」と呼ばれる独自の表現技法により、言語の習熟に限定されずに絵や線の配置によって感情や物語を表現できる。マンガ制作による自己表現を、将来的に教育・保育に携わることを目指す大学生、子どもおよび保護者らとともに探り、得られた知見から課題と今後の展望を報告するものである。

発表では、まず堤ひろゆき（上武大学）が、研究背景およびワークショップの概要を説明し、研究全体のデザインを提示した。

第一報告では伊藤理絵（常葉大学）が「言語」「"非言語"表現」の視点から、ワークショップ参加者の身体動作およびオノマトペによる表現に焦点を当てて、自己を表現する機会としてのマンガ・ワークショップの可能性を提示した。加えて、子どもと関わる保育者養成において、「感情」を伴う「言語」を指導することができる関わり方に目を向ける可能性にも言及した。

第二報告では倉田よしみ（大手前大学・マンガ家）によるマンガ・ワークショップ実践の講師視点での気づきおよび総括を行った。日本以外の国・地域でのワークショップ経験との相違点に加え、子どもが「自分のキャラクターを描く」ためのワーク等、具体的な工夫を取り上げながら自己表現を促す取り組みを紹介した。

報告を踏まえ、討論者の白石さや（東京大学名誉教授）により自己表現のハードルを下げること、そのためにも「みんなが一律に何かをする」ための方法ではなく自己表現とコミュニケーションに「オルタナティブな選択肢を増やす」重要性が指摘された。

参加者からは、他国のマンガの状況や既存の教育との接合可能性にもとづく質疑がなされ、活発な議論が行われた。

大会アルバム

名城大のスタッフの皆さんありがとうございます！

久々の懇親会！
乾杯は平野健一郎先生です

激務の実行委員長・鈴村先生を捕まえて一枚！

学会の今後を議論する総会の様子です

自由論題A「性と生」
芝崎厚士（司会）、相原征代、亀山光明

本自由論題では、相原征代会員（北陸大学）による「日本における恋愛と結婚の「際」とは？　女性を対象とした結婚に関するアンケート結果から」、および亀山光明会員（プリンストン大学宗教学部博士課程）による「観音の躍動　一九〇〇年代における救世教の展開と生（性）の言説」、以上２つの報告がなされた。

相原報告は、結婚という制度そのものが男女不平等を再生産しているのではないか、という問いかけにもとづき、結婚が女性の依存を前提とする制度であるがゆえに、男女平等が改善しないのではないか、という仮説を提示する。その上で第一にオンラインでのアンケート調査、第二にゼミでのディベートの結果に基づいて、第三にテキストマイニングによる連想語分析などを行い、そこから得られた知見を検証するものであった。その結果、「恋愛」と「結婚」の本当の「際」（きわ）は40代にある、すなわち結婚のイメージが「幸せ」から「忍耐」に変わる点にあるのではないかということ、また世代ごとにイメージの持ち方が変化していることなどが明らかになった。

亀山報告は、1886年に大道長安が信越地方で創始し、キリスト教から改宗した仏教学者吉田修夫が継承し、その死後衰退した救世教を研究対象として、「生命」をめぐる観世音菩薩を中心とした革新的仏教運動であった同教と、生殖管理・優勢政策をめぐる帝国日本の生政治との関連を、大正生命主義の思潮といった同時代的なグローバルな文脈の中で歴史的に意義づけるものであった。具体的には、現在では「忘れられた」宗教運動となっている救世教の登場と展開を跡づけた上で、「生命」「実在」「現世利益」に集約される吉田の観音思想を、生命主義との関係、子授けの利益、狩野芳崖「悲母観音」との出会いをきっかけとした観音をめぐる「視覚的な信仰システム」のありようを考察し、近代日本宗教史と人種の関係という未開拓の分野への研究を進めようとしている。

両報告に対しては、研究対象そのもの、ないし方法論的な課題に対して、多くの参加者の方々から積極的なコメント、質疑が提示され、報告者がこれらに対して積極的に応答することで、フロア全体として両報告の研究の可能性や発展の方向性について多くの知見を共有することができた。「性と生」という主題は昨今ますますグローバルな課題となっている、国際文化学にとっても極めて重要な研究対象であり、社会学と歴史学というディシプリンの相違を超えて、今後も本学会で積極的な議論が行われることを期待したい。

自由論題B「日中関係と文化交流」
趙貴花（司会）、劉紅、梁鎮輝、劉晶洋

本セッションの第一報告は、劉紅会員（武蔵野大学）の「日本の新聞報道に見る胡適―1920年代を中心に」であった。同報告は、1920年代の日本の新聞報道における胡適像そして日本のマスメディアが中国の思想界の新思潮をどう見ていたかを考察するものである。劉会員は、「1920年代に、中国の思想界の代表的な存在であった胡適は、隣国の日本社会でも時代の先駆者として見られ、注目され期待されていた」と述べた。特に、1920年代の朝日新聞と読売新聞は雑誌や翻訳書よりも早く中国の思想界の新動向と胡適を紹介していたと指摘した。質疑応答では、日本の新聞報道や学界における胡適に対する多様な見方および1920年代頃の中国に対する日本の政治家の姿勢への見方などについて議論が行われた。

第二報告は、梁鎮輝会員（明徳義塾高等学校）の「幸田露伴の『水滸伝』論について―胡適との比較から―」であった。同報告は、幸田露伴が明治・大正・昭和初期に行った『水滸伝』に関する一連の翻案・翻訳、研究や創作を、近代中国における胡適の『水滸伝』研究と比較分析し、幸田露伴の持つ『水滸伝』への思索について考察するものである。梁会員は、近代中国の革命思想の文脈において「反政府」的なものとして評価されている『水滸伝』を、幸田露伴はあくまでも「忠義」の物語として捉えたと指摘した。質疑応答では、『水滸伝』が誕生した時代、この文学作品に対する胡適と露伴の異なる評価と彼らが生きていた時代との関係性などについて議論が行われた。

第三報告は、劉晶洋（宇都宮大学）の「明治期における関羽表象の変遷に関する一考察―日清戦争前後を中心―」であった。同報告では、江戸時代末期から明治期にかけて、節句の日に家内に鍾馗や関羽の画像をかけるなどの風習があり、関羽のシンボルである青龍偃月刀は子供の人気玩具であったが、日清戦争が勃発することで帝国清の国家神である関羽に対する意識的な排除の動きが見られ、節句における関羽要素が完全に衰退し、関羽人形が山車から下ろされるなどの事象が確認できたことが示された。劉会員は一般大衆が祭りに用いられる人形に対する扱い方には、国家権力への従順と内在化された文化的矜持が複雑に絡み合っていることを指摘した。質疑応答では、清における朝廷と民衆の異なる関羽信仰や、日本と韓国における関羽への捉え方および受け入れ要素の違いなどについて議論が交わされた。

以上、本セッションの３報告は中国の代表的な文学作品の『水滸伝』に対する日本と中国の近代の知識人たちの異なる解釈と理解、『三国志演義』の登場人物の関羽が日本においても広く受け入れられ、その表象が時代を超え、特に戦争を経験する中で変化してきたことが示された。豊富な資料に基づいた考究から日中両国の文化交流の歴史と民間交流の可能性を多角的な視点から提示されたことは興味深い。

自由論題C　「都市とアイデンティティ」
都丸潤子（司会）、藤田賀久、大和裕美子

第一報告の藤田賀久会員は「奈良ホテルの建設－揺れ動いた明治日本の自己認識の帰結点として」と題して、明治日本の自己認識の変化を、「奈良」という地を通じて検討した。明治初期、奈良の古刹は神仏分離令・上知令、そして旧物破壊によって衰退したが、日露戦争後には、外賓客を迎える「奈良ホテル」の設立（1909年）を見た。すなわち、かつて日本人自らが破壊した奈良の地が、海外に誇るべき日本の歴史・文化・美術の都へと転身したことが指摘された。

この転身をもたらした要因として、フェノロサや岡倉天心ら古社寺保存法の制定を導く動き、奈良県議会の議論、そして日清・日露戦争の影響などが説得的に論じられた。そして、戦勝によるナショナリズムの高揚、文明国の責務として文化財を保護する自覚、東洋文化の保護者という自認などが日本人に抱かれる過程も検討された。こうした国際社会における自己の立ち位置や役割などに対する認識の変化が、奈良に対する日本人の態度の変化に如実に見られたと結論づけられた。

第二報告は大和裕美子会員による「福岡県における非核自治体宣言採択までの過程と議論」であった。本報告では、1980年代に日本の地方自治体において相次いだ、非核・核兵器廃絶の宣言、いわゆる「非核都市宣言」、「非核自治体宣言」と呼ばれる宣言可決の実態について、福岡県の各自治体の議会会議録を参照しつつ、議会においてどのような手順や議論を経て宣言に至ったのか、類型化を通して考察がなされた。

マンチェスターで1980年11月に始まった非核都市宣言運動は、国境を越えて日本にも伝播した。80年代前半でもっとも宣言自治体数が多かったのが福岡県であった。被爆者の会や労働組合、改憲阻止、戦争反対といった各種団体による草の根運動からスタートし、署名収集、請願等の議会提出、議会での提起、可決というプロセスを経た点で各自治体の共通性は大きいものの、宣言可決に要した時間は自治体によってさまざまであったと指摘された。また基本的には、保守対革新という構図の中、党として自民党は反対する立場にあったが、自民党の地方支部の中には、核廃絶は人類の悲願とし、積極的に宣言に賛成し、可決した自治体も存在していたことなど、単純化し難い様相を呈した、とまとめられた。

両報告に対してフロアから多くの質問が寄せられた。藤田報告に対しては、奈良に対する明治以前の認識はいかなるもので、その後の認識の揺れ動きを支えたものは何だったのか、ナショナリズムに吸収されたという古社寺保存に関する国内の党派争いはどのようなものだったか、仏教に関する認識の変化はあったか、台湾やシンガポールなど他国における歴史的建造物への認識との比較検討は可能か、などの論点が出された。また、大和報告については、各都市における基地の有無と宣言の有無の関連性、類型化の意義、労働組合との関係、各都市の海外とのつながり、他のアジア都市への影響、などについて質問があった。いずれも活発な質疑応答がなされ、４歳のフロア参加者もあって温かい雰囲気に包まれたセッションであった。

自由論題D「アジアと日本」
牧田東一（司会）、シュディプト・ダス、菅野敦志

自由論題Dでは、アジアと日本の間で起きた、戦前から戦後にかけての大きな出来事、すなわち独立運動と国際スポーツイベントでの文化的背景の異なる人々の交流とそこに賭けた想いについての論考が発表された。

インドのビッショ・バロティ大学（通称、タゴール大学）のシュディプト・ダス会員の発表「印度独立運動に於ける『心の絆』」は、仙台の丹野清（1975～1962年）というこれまであまり注目されなかった人物を掘り起こし、従来日の当たらなかった彼とラスビハリ・ボースとの交友を軸に、戦前のインド独立運動を共通目的とした日印関係の始まりを描いている。独学で学んだ丹野は在日のインド独立運動家と親交を深め、1902年の日印倶楽部の設立に加わり、これが翌年の日印協会の設立に繋がった。英国が日英同盟を使って日本政府に圧力をかけ日印協会の活動が制約を受けると、丹野は仙台に印度保全会を設立し、ガンディーの思想に共鳴してガンディー協会も設立している。1911年に最初の著作である「印度観」を書き、1927年には「印度独立論」「世界平和論」などを発表してインド解放を訴えた。この戦前の功績が独立後のインド政府に認められて、1957年に来日したネルー首相から感謝状が贈呈されている。これまでインド独立運動と日本の関係では、チャンドラ・ボースのインド国民軍と日本軍の関係が中心に語られることが多かったが、それとは異なる日印関係のもう一つのルーツに着目した研究である。

共立女子大学国際学部の菅野敦志会員の発表「1954年マニラアジア大会と“外地”生まれの選手たち」は、戦後日本のアジア復帰の第一歩ともされる1954年にマニラで開かれた第2回アジア大会に焦点を当て、この政治的意味が大きかった国際スポーツイベントに参加した「外地」出身の日本人選手の心情を描き出そうとする研究である。台湾生まれの溝口百合子、満州生まれの戸上正雄、朝鮮半島生まれの市毛弘文の３選手である。彼らと関係者のインタビューを通じて、外地から内地に戻ってきた半生での経験やアジアと日本に対する想いや世界観、また日本を代表して反日意識が強かったフィリピンのマニラでアジア出身の選手と競う気持ちなどを理解しようとするものである。アジアの日本植民地生まれで、戦後に「見知らぬ祖国」への移動と貧しい祖国で生き抜く生存戦略を聞き取り、内地生まれの選手たちとはおそらく異なったアジア観を持っていたはずの彼らのアジア大会への感じ方やアジアの人々との関わり方を探ろうという意図である。

従来、植民地出身の当該国人が日本代表としてオリンピック等に参加し、戦後に母国で批判された事例については比較的知られているが、外地生まれの日本人選手についての研究はなく、アジアと日本の揺れ動いた境界と越境についての新たな知見が得られる期待は大きい。また、スポーツを通しての戦後の和解についての事例研究ともなっている。

両発表はともに研究の中間報告であり、その完成が待たれる。

自由論題E「創造と表現」
高橋梓（司会）、門脇正法、西山葉子、斉藤理

自由論題Eは人々の表現に文化が与える影響の強さに焦点を当てた議論が展開された。

門脇正法（駒澤大学）会員による第一報告「梶原一騎から見えてくるマンガ原作者の役割」は、戦後から現在に至るまでのマンガ原作者の役割の変容を巡るものである。戦後においてもマンガの作画と原作の担当が異なる事例が確認されるが、梶原一騎の登場は週刊誌の登場に代表される社会的な変化と密接な関係を持つ。いわば文化的背景が梶原一騎をマンガ原作者として確立させたのだ。門脇会員はマンガ原作者である自身の経験に基づく専門知から、アクター・ネットワーク・セオリーに基づき、梶原一騎以前・以後のマンガ原作者の役割の変質の区分を試みた。総合芸術としてのマンガが、制作段階においていかに多様な文化と関係しているかが示されるとともに、時代の中で原作者の役割が変化せざるを得ない理由が説得的に示された。

第二報告は西山葉子（フリーランス）会員による「なぜ都市はアーティスト／ライター・アット・リスクを受け入れるのか？――都市外交の研究としてのInternational Cities of Refuge Network（ICORN）のケーススタディ――」である。2006年に設立されたICORNは、政治体制により活動が抑圧され、居住地を追われた表現者を保護するための組織である。西山会員の問いは、ICORNが国ではなく都市を主体とする点に向けられる。その緻密な分析により浮かび上がってきたのは、都市単位の活動を行うゆえに、様々な外交上の問題を避けることができるという利点である。また巨大な単位である国とは異なる都市であるゆえに、独自の理念を掲げることができ、避難民の生活を細やかに保障することが可能だ。ICORNの活動を巡り、国と個人の中間に存在する都市ゆえの特性に気づきを与える報告であった。

斉藤理（山口県立大学）会員による第三報告「文化接触による「いかもの」の形成過程について――20世紀初頭の「飾る」を再考する――」は、ブルーノ・タウトの批評を題材とするものである。明治期以降の近代化により、日本建築は西洋の様式を受け入れ、結果として「飾る」という行為がその土地に根差した自然の風景から大きく逸脱することとなった。斉藤会員はタウトの批判の深層に潜む各国文化の真正性の希求に着目し、人々の暮らしとの「釣り合い」を重視した建築様式を評価した事実を明らかにした。タウトの視点は、西洋的近代化に翻弄される日本の実像と、本来の文化を容易に変質させてしまう異文化の強大さを示すものであると言えるだろう。

時代により役割が変化するマンガ原作者、国外逃亡を余儀なくされるアーティスト、そして海外文化の影響を受けざるを得ない建築文化――いずれも文化の創発性に直面した人々がいかなる創造をなし得るかをめぐる重要な議論であった。報告者たちの今後の研究の進展を祈念したい。

自由論題F「言語と文化」
松井真之介（司会）、赤松美和、鈴木勉、金美連

第一報告は、赤松美和会員（同志社大学大学院）による「ハワイアン・ボード (Hawaiian Evangelical Association)の国際主義と日本語学校―『フレンド(The Friend)』を通じて 1928年から1941年―」と題された発表である。本発表は、日本人移民の子弟が人口の40%を占めたという1920年代以降のハワイにおける日系二世市民の教育問題について、キリスト教伝道団体ハワイアン・ボード（HEA）が時勢から受けた影響に対して取った戦略について考察したものであった。具体的には、国際主義と「寛容かつ巧妙な」アメリカ化の要素を持つHEA内の教育支援プログラム「フレンド平和奨学金（FPS）」が、特に仏教系の日本語学校の増加を脅威と感じたホスト社会の懸念を受けて、従来の大学教育支援から国境を超えた異文化交流プログラム、日本留学へと変更していき、かつその留学先は仏教系の影響が及ばずに日本語と文化が学べるキリスト教系の同志社大学であった点を多方面から紐解いていく試みであった。

第2報告は、鈴木勉会員（青山学院大学大学院）による「戦後日本の文化外交における『文化協力』の成立とその課題」と題された発表である。本発表は、日本の文化外交政策に関する研究の歴史の浅さと、それに起因する国益概念における文化外交の意味づけの曖昧さ、さらに文化外交史における世界益型施策の定義や評価の不在といった問題に関して、文化外交の施策の一つである「文化協力」の変遷に注目するものであった。そうして文化協力に関する言説をたどることで、戦後日本の文化協力がアジアへの経済協力の補填の機能と同時に「経済侵略」イメージに対する「隠れ蓑」としての機能があった点や、日本経済が前進した時代には文化協力が日本外交のメインストリームで語られはじめたにも関わらず、日本経済の後退にしたがって文化協力もメインストリームから後退していくという点を指摘し、その背景には、国益における「価値観」の議論が不十分であったのではないかと考察している。

第3報告は、金美連会員（日本大学）による「大学生の海外留学の現状に関する日韓比較研究」と題された発表である。本発表は、急激な少子化による人材不足や高等教育機関の存続危機、地方大学の脆弱さなど共通の課題を抱える日本と韓国の大学における留学生の事情を、留学生受け入れと送り出しの両面において、両国の政策、留学者数推移、受け入れ留学生の国籍、留学先の国籍について豊富な資料を元に比較分析するものであった。そこから共通点として、両国とも受け入れはアジア圏メインで、私費かつ人文社会系の留学生が多い点、一方送り出しは英語圏と中国語圏が多い点が指摘された。相違点としては「留学」の定義が期間によって違う点、受け入れ留学生が韓国で就職する割合が低い点、韓国からの送り出し留学生が日本よりも圧倒的に多い点などがあげられた。特に最後の相違点に関しては韓国の兵役の問題が大きく影響しているという指摘は非常に興味深かった。

以上3報告ともに、歴史学や教育学、政治学、社会学の視点と方法論が複数交錯し分野横断した大変意欲的な報告であり、非常に意義深いものであったといえる。

大学院生交流会報告

恒例となった大学生交流会の様子を葉柳会員に
お伝えいただきます。

葉柳 和則（長崎大学、副会長）

第22回の大学院生交流会は、大会初日、7月8日（土曜日）の昼休みの時間を利用して、名城大学のDN302教室で開催されました。参加者は12名。最近まで院生だった方から、未来の院生まで、学年も専門も多様な顔ぶれでした。

最初に自己紹介をし、それに基づいて研究対象や手法をもとに3つのグループを作り、「もし自分たちで共同研究をするとしたら」という仮定のもとで、ブレインストーミングを行いました。昨年度もそうでしたが、全員が積極的にディスカッションに参加し、共同研究の枠組を模索するために意見を出し合う姿に深い感銘を受けました。

グループ1は、「ナショナリズムと神話」というテーマを軸に、政党が、ナショナルな国民統合を実現する際、広義の「神話」を梃子にして民衆を動員するプロセスについて、研究の役割分担をめぐって議論しました。

グループ2は、「知識人による文化の運搬/越境」というテーマで、学者、ジャーナリスト、翻訳家、文人、絵師といった知識人が空間の移動と同時に文化の移動と接触をも引き起こす様を明らかにするための土台を模索しました。

グループル3は、まず「ジェンダー」というキーワードを設定した上で、「国際文化における生と性」というテーマに、「人種」という要素を関連付けることができるかどうか、検討していました。

時間をかけて研究のネットワークを作っていけば、本学会での共通論題のみならず、科学研究費プロジェクトや研究書の出版にまで展開していくことが可能なテーマでした。学会としても共同研究のための補助や共通論題の開催等、院生交流会で生まれたネットワークの「芽」が、大きな木へと成長し、研究成果という実を結ぶための支援をしていきたいと思っています。

院生交流会に関して、もうひとつうれしいご報告があります。大学院生交流会に続く時間帯に開催された共通論題I「近代における西洋文明の受容と選択――周縁からのアプローチ」（代表者：田中佑実）は、第21回全国大会の際の院生交流会で生まれた研究会が「芽」となって実現したものです。私が司会を務めさせていただきましたが、研究の輪郭をより明確にし、さらに数名のメンバーの参画を促せば、国際文化学の新しい局面を拓きうるプロジェクトだという印象を受けました。

実質45分程度の時間の中で、効率よくディスカッションを進めるために、いくつか気を付けるべきポイントも見えてきたので、来年の第23回大会に向けてフィードバックしていきたいと思っています。

今回の大学院生交流会からはどんな企画が生まれるでしょうか？

第23回全国大会の開催に向けて

平島（奥村）みさ（東洋大学）

日本国際文化学会の第23回全国大会は、2023年7月13日(土)、14日(日)に東洋大学にて開催する予定です。このたびは江戸情緒を色濃く残す、東京都文京区は白山（はくさん）の地に皆様をお迎えすることとなりました。

今回、東洋大学（白山キャンパス）が全国大会の開催校の大役を担うことになった直接の契機は、馬場孝前会長からのお声がけでした。すなわち、2023年1月に全国大会開催の打診をいただき、その後、都丸現会長からもお励ましをいただきました。本学では当学会の会員は私しかおりません関係で、躊躇いたしましたが、理事の皆様方からも心強いご支援をいただき、ご提案をありがたくお引き受けいたしました。

さて、創始者井上円了（1858~1919）は「諸学の基礎は哲学にあり」とし、東洋大学は「哲学の白山」と世に知られ、2024年には建学137年を迎えます。円了は当時には稀な国際人でありました。生涯に世界旅行を3回実施し、教育の重要さについて日本中を講じて回り、5,400回を越える講演で、140万人に語り続けました。

東洋大学は文部科学省2014年度「スーパーグローバル大学 創成支援 タイプB(グローバル化牽引型)」に申請した「TOYO Global Diamonds グローバルリーダーの集うアジアのハブ大学を目指して」が採択されました。地球規模の課題に「アジアのハブ大学」としての使命を果たすべく、異なる価値観や多様な思考を受容し、教育・研究を通じて新たなイノベーションを実現し、学生たちをグローバル人材へと成長させる教育の実践を目的としております。私が所属する社会学部国際社会学科は多様性に学び、共生社会を創造することを目指し、次世代の国際社会を率いる「地球市民」の育成を目標に掲げ、現場体験を重視した実践的なグローバル・シティズンシップ教育に取り組んでおります。

このように本学の建学の理念、教育方針に鑑みますと、当学会の主旨とみごとに合致しており、不思議なえにしを感じる次第でございます。

第23回全国大会は、久しぶりに東京での開催となります。白山キャンパスのすぐ裏にはアジサイで有名な白山神社、駒込には江戸の名園六義園。六義園は五代将軍徳川綱吉の命により柳沢吉保が設計した名園です。「谷根千」地域には江戸時代から続く職人仕事、商店も多く、谷中銀座は国内外の観光客に大人気の観光スポットとなっています。どうぞ、周辺の散策もお楽しみくださいませ。

冒頭井上円了の活動について紹介しましたが、円了は妖怪学の研究者としても有名です。フィンランドからムーミン（カバではなく妖精です！）も大学のマスコットとして一時逗留しておりました。蒸し暑い夏にふと涼風が吹くたそがれどき、皆さまも白山の森で妖怪や妖精にも出会えるかもしれませんね!

来年7月に、皆さまを東洋大学白山キャンパスにお迎えできることを、今から心待ちにしております。

次回全国大会：2024年7月13日、14日

共通論題・自由論題の応募をお待ちしております。
応募先/問い合わせ先：第23回全国大会実行委員会
（intercultural2024@gmail.com）
【共通論題】締切：2023年12月31日［日］必着
【自由論題】締切：2024年3月20日［水］必着

平野健一郎賞受賞者紹介

第13回平野健一郎賞は田中佑実氏（北海道大学助教）が受賞されました。
受賞論文は「1900年パリ万博のリュイユラグにみるフィンランドの選択―芸術家アクセリ・ガッレン＝カッレラに着目して」です。

この度は平野健一郎賞を頂き、誠にありがとうございました。私が日本国際文化学会に入会したのは修士課程の学生のときでした。博士課程から現在まで北海道大学の文化人類学研究室に所属しておりますが、学部と修士課程は佐賀大学で美学や美術史を学んでいました。学部時代の指導教員であり、恩師にあたる木原誠先生の勧めで入会したのが、こちらの学会です。入会当初は学会という研究者のコミュニティーがどういうものかも正直よくわかっていない状態でしたが、毎年この学会では発表するよう努めて、この度のインターカルチュラル21号に研究論文を掲載させていただきました。

私はフィンランドを研究の舞台としています。今回、平野健一郎賞を受賞させていただいた論文は、フィンランドという国と人々の面白さ、そして「文明や野生」「中央と周縁」「西と東」「自然と人間」というような二項対立をフィンランドの人々が巧みに利用したり、工夫して立ち振る舞うしなやかさを描きたかったという想いがあり、執筆いたしました。2022年の2月から続いているロシアとウクライナによる戦争においても、「西と東」の間としてのフィンランドがNATO加盟を巡り、改めて認識されたように感じています。今回の論文は、主に芸術の視点から1900年前後のフィンランドを眺めたものでしたが、フィンランドにとっては今日の政治状況にも通じる大きなテーマを扱ったものでもありました。フィンランドは歴史的に隣国スウェーデンとロシア、双方の一部であった時代を経験しています。東の国ロシアとは、独立を守るために1939年の冬戦争、1941年からの継続戦争で戦い、その記憶は12月6日の独立記念日を基盤に、今日まで人々の間で語り継がれています。ロシアとウクライナの戦争はフィンランドにとって決して他人事ではありません。フィンランドの人々は今起こっている戦争と冬戦争を重ねて考えているのです。ロシアとウクライナの戦争を巡るフィンランドの振る舞いとNATO加盟は、「西と東」の狭間でフィンランドが経験してきた歴史に深く根差しています。

ロシアとウクライナの戦争が始まって1年半が経ちました。ウクライナの人々だけでなく、ロシアの人々も命を落とし、互いに傷つけ合い、疲弊しています。この現状を前に、国際文化学は何ができるでしょうか。国際文化学の強みは「間で考えること」にあります。私たちは今、文化と

文化、国と国、権力者または国のトップと国民たち、２つの意見、過去と現在の間を結び付けて考える必要がありそうです。その狭間で生きてきた、そして今を生きている私たちの現状を見直し、これからの未来を考えていく方法のひとつとして、国際文化学に期待したいと思います。

最後になりますが、本学会の皆さまに感謝申し上げます。第22回名城大学での研究大会では、初めて共通論題の発表をさせていただきました。実は私にとって、学会入会も個人発表も、研究論文掲載もこの学会が初めてでした。日本国際文化学会の皆さまには研究者として、本当に育ててもらっている感覚が強くありますし、毎年の研究大会参加も楽しみにしています。まだまだ未熟ですが、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

授賞式の様子

私の研究歴—会員紹介

本号では坂口可奈会員にご寄稿いただきました。
シンガポールをフィールドとする研究の軌跡をご紹介いただきます。

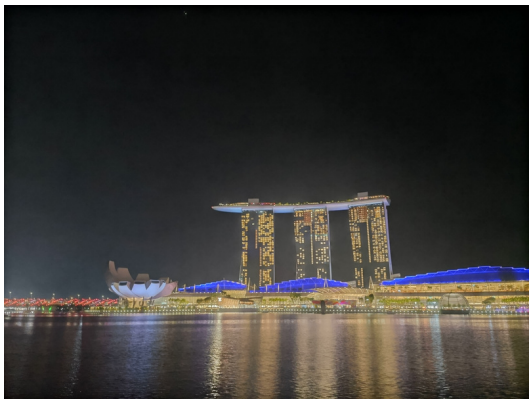
坂口可奈（北海商科大学講師）

「地域研究ってどんなもの？」これは、地域研究者がよく聞かれる質問だと思います。地域研究には様々なスタイルがあって、研究者によって説明も異なります。ですが、一つの答えとしては、地域研究とはある国や地域自体を理解するための学問といったところでしょうか。ミクロの視点を大切にしつつ、マクロ的にそして分野統合的に対象を見ることに地域研究の醍醐味があります。

私にとっての「ある国や地域」はシンガポールです。はじめてシンガポールを訪れた時に抱いた「この国をもっと知りたい」という思いと「シンガポールはどのように、なぜ、どのような国として発展してきたのか」という疑問が今でも研究テーマの種となっています。

いま考えると、はじめは国家の「つくり方」に興味関心がありました。そのため、シンガポールの国家建設における多「人種」共生政策、教育政策、社会保障政策、移民政策の役割に焦点を置いていました。これらの政策の分析を通して、シンガポールの発展の構造と課題を明らかにすることができたと思います。この「つくり方」は博士論文を経て『シンガポールの奇跡－発展の秘訣と新たな課題』（早稲田大学出版部）として形にすることができました。

ですが、ここ数年は国家建設の中でも国家ブランディングなどの国家の「見せ方」に関心を持っています。国内への「見せ方」に関しては歴史教科書の記述を読みときましたが、国外への「見せ方」については観光資源開発に注目しています。「見せ方」の観点から観光資源開発を分析すると、経済的側面以外でも国家建設との関係性が見えてきます。まだまだ道のりは長そうですが、「見せ方」を掘り下げていけば、また新しいシンガポールの姿が見えてくるのではないかと考えています。



シンガポールの夜景

国際文化学会にはシンガポール研究をされている先生方とシンガポールとのご縁をお持ちの先生方がたくさんいらっしゃるので、大会のたびに直接的/間接的にシンガポールについての発見があります。また、以前の大会をきっかけに、多摩大学のシンガポール・スタディツアー事前学習の講師として、シンガポールに興味を持つ学生さんと話す機会もいただきました。先生方や学生さんたちと話していると、研究したい内容がどんどん増えていきます。古い墓地から当時の国際関係やヒトの移動の何かが見えてくるかもしれない、グルカ部隊のことも調べてみたい、戦前の在シンガポール日本人についても調べてみたい、食からシンガポール文化を見てみたら……など、やりたいことは溜まる一方ですが、まずは迷走せず、焦らず、こつこつと「見せ方」の研究を進めていきたいと考えています。

大会等でお会いできましたら、お気軽にお声がけいただけると嬉しく思います。これからもよろしくお願いいたします。

2023年度ICCO短期集中セミナー実施報告

４年振りにICCO短期集中セミナーを実地開催！

ICCO（文化交流創成コーディネーター）資格の短期集中セミナーは2015年度に開始され、京都と沖縄で毎年の夏の風物詩となってきました。ところが、2020年度から始まったコロナ禍により、３年連続で実地開催ができないという事態に陥ることになりました（2022年度はオンライン開催）。

それが今年度になり、コロナ感染の猛威による影響が低下したことで、ついに実に４年振りの現地開催を実現することができました。今回の短期集中セミナーは8月27日から9月2日にかけて、京都の龍谷大学深草学舎を中心としておこなわれ、各校から18名の参加者が集まりました。ひさびさの開催ということで、運営事務局としていろいろ不安な面もありましたが、多くの学会員のみなさまにご協力いただき、無事、全日程を完了することができました。

進め方は例年通りで、3名ずつの6グループに分かれて、それぞれのグループでテーマを相談した上で、フィールドワークをおこなうというものです。今回は、初日にすべての参加者に、それぞれ自分の考えたテーマを発表してもらった上で、その後にグループ分けをおこないました。この方法だと、その後のグループごとの相談がやりやすいように感じました。実は、これまで意外と多かったのが、自分がやりたかったテーマとグループで決めたテーマが異なるために、最後まで不完全燃焼の気分を持つ参加者でした。それが、最初に自分のテーマについて一度説明し、質疑応答を経ることで、逆にグループとしてよりよい案を追求するという気持ちになったのではないかと推察しています。

そうして話し合いによって決まった各グループのテーマは下記の通りです。

Ａ班「20歳が語る、日本酒～伏見のお酒から得た知見~」
Ｂ班「京野菜を守るのはだれ？」
Ｃ班「京都は多文化をどう受け入れてきたのか」
Ｄ班「居住地として考える「京」」
Ｅ班「宗教視察＝観光地？」
Ｆ班「いとおかし！今の百人一首ゆかりの地の姿」

これらのテーマに沿って６グループのフィールドワークが進められ、9月2日にはそれぞれ20分の発表がおこなわれました。

これまでの京都での開催の際の発表では、どうしても「観光」に特化したテーマが多く、ややステレオタイプな見方なのではないかという評価がありました。今回も、ほとんどが観光に関連するテーマではあったのですが、その内容にはやや変化も見られたように思われます。つまり、単なる観光都市としての京都礼賛ではなく、その光と影の両面をとらえた多角的な考察が、どの発表にもあったように感じられたのです。それは、オーバー・ツーリズムやコロナ禍での状況を踏まえて、「観光」というものに関する見方が、以前よりも深まったからではないかと考えられます。

ともあれ、ひさしぶりにICCO短期集中セミナーを運営側として体験して感じたことは一つです。「やっぱり、実地での開催は、毎日が刺激に満ちていて楽しい！」、それに尽きます。（ICCO事務局　松居竜五）

久々の対面開催！
出会いと学びの日々でした！

事務局からのお知らせ

学会誌『インターカルチュラル』のJ-stage 公開のご案内

2022年度より学会年報編集委員のご尽力で学会誌『インターカルチュラル』のJ-stage（電子ジャーナル公開システム）の登録作業が進められてきました。

2023年11月1日より、1号から19号につきましては、オープンアクセスでの公開を開始いたしました。20号、21号は現時点ではパスワード付きの会員限定閲覧としております。会員の皆様にはパスワードを10月末に送付しております。案内が未着の方は学会事務局までご連絡ください。

2024年度全国大会開催のご案内

2024年度全国大会の開催予定日は下記のとおりです。

日時：2024年7月13日（土）・14日（日）

会場：東洋大学白山キャンパス

共通論題の募集は12月末締切、自由論題の募集は2024年3月20日締切です。詳細はメーリングリストや学会WEBページをご覧ください。

応募先/問い合わせ先：第23回全国大会実行委員会　（intercultural2024@gmail.com）

会費納入のお願い

2023年度の年会費の納入をお願いいたします。一般会員：10,000円、大学院生：5,000円、学部生：2,000円

◆ゆうちょ銀行からお振込みのとき◆記号番号　00920-8-325835 日本国際文化学会（ニホンコクサイブンカガッカイ）

◆ゆうちょ銀行以外等からお振込みのとき◆ ゆうちょ銀行　店名〇九九　店番099　当座預金　口座番号0325835

ニューズレター＆メーリングリスト掲載情報募集（随時）

学会会員の新刊の情報や、採用情報や講演会など会員に有用と思われる情報があれば、ぜひ学会事務局までご連絡ください。ニューズレターで掲載中の「私の研究歴」への自薦他薦もお待ちしております。

ご連絡先などの変更についてのご連絡のお願い

ご所属先やご連絡先の変更がございましたら、学会事務局へご連絡くださいますようご協力お願いいたします。

Inter cultural

国際文化学

【編集後記】

名城大学の学会はどこを切り取っても楽しい思い出ばかり。やはり対面での議論は格別です。二日目のフォーラムでは編集者・高橋が連れてきた近畿大学の学部生や卒業生が大活躍！詳しくは次号『インターカルチュラル』のフォーラム特集で！（近畿大学：高橋梓）

フォーラムで活躍した二人とともに